第 5 章

課業期間中研修サポート試行プログラムの構想と展開

第５章　課業期間中研修サポート試行プログラムの構想と展開

１　社会科の研修サポートの構想と展開

⑴　研修サポートの目的

徳島県吉野川市立牛島小学校・西村広志教諭と連携して展開した「10年経験者課業中研修サポートプログラム」は，次の２点を目的とした。

①　2009年２月実施の10年経験者校内授業研究会で公開・実践する授業の構想と学習指導案の作成および実践後の評価と改善について，理論的・実践的な指導・助言をすることにより，西村教諭の授業力の向上を支援する。

②　西村教諭が特定研究課題とする「授業研究会を中核とした校内研修の展開方法」について指導・助言・実践することを通じて，学校全体の授業力向上研修の実践を支援する。

⑵　研修サポートの内容・方法

研修サポートの目的を達成するために，具体的なプログラムを，次の日程と方法により実施した。

①　2008年12月中，メールによる情報交換を通じて，西村教諭が今年度取り組んできた研修の課題と内容を把握するとともに，年度末までに展開する研修サポート内容を具体的に定めた。

②　2009年１月７日（水）に牛島小学校を訪問し，西村教諭から提案された２月授業研修会用の学習指導案について協議した。そして，2009年２月27日（金）に実施された牛島小学校公開授業研究会に参加し，西村教諭の社会科授業実践に対してその特色と課題，改善点等を指摘した。具体的には，西村教諭が構想・実践した社会科授業は，第４学年単元「徳島のよさを発見しよう！」であった。授業は，問題追究力・意思決定力・情報産出力を培うことを目標に構想され，「徳島のよさって何だろう」，「低地・山地・海辺のくらしをくらべ，にているところをさがそう」，「徳島と大阪とをくらべてみよう。徳島にあって大阪にないもの，大阪にあって徳島にないものをさがそう」，「わたしたちの徳島をアピールしよう」という一連の学習問題により展開した。実践後の合評会で，梅津は，西村教諭の実践が，「徳島のよさ」を実現するための地元の人々の願い・工夫・努力・意義を，子どもたちが調べ，まとめ，発表する学習を通じて共感的に理解していくとともに，大阪と徳島との対比により，徳島から大阪へのストロー効果の概念形成と地域の抱える課題への認識形成をも達成する優れた実践になっていることを指摘した。合わせて，本授業は意思決定力育成が弱くなった課題を指摘し，今日地域の「よさ」をめぐる競争と選択が激しくなっていることをふまえて，「徳島のよさと大阪のよさ，あなたはどちらを選ぶ？」という論争問題にもとづく意思決定学習を構想できることを指摘した。

③　2009年３月に，西村教諭が執筆する特定課題研究「授業研究会を中核とした校内研修～牛島小学校の場合～」の内容について指導・助言する。（３月下旬実施予定）

⑶　研修サポートの成果と課題

本プログラムの成果は，10年経験者研修における学校での課業中の取組に大学教員が直接的に関わり支援する仕組みの基礎を築くことができたことである。

課題は，上記の成果を基盤にしつつ，現職教員の多忙さや学校におけるネット環境等の制約条件を考慮した，研修者に負担の少ない成就感のある研修サポート体制を完成させることである。

（梅津　正美）

2　音楽科の研修サポートの構想と展開

音楽科では，鳴門教育大学附属中学校の森本祥子教諭が10年経験者として諸々の研修に参加していた。そこで，森本教諭が勤務している附属中学校長に承諾を得た後に，主としてメールを活用しながら，サポートを開始した。

森本教諭の課業期間中研修の課題は，二つあった。一つは，「思考力・判断力・表現力をはぐくむ中学校音楽授業の構想と実践－言語活動の充実を通して－」という課題である。この課題は，この附属中学校の研究課題から派生してきたものであるが，特に，森本教諭は，鑑賞指導場面での言語活動のあり方をめぐって，考察を開始していた。また，森本教諭は，来年度，島根県で開催される中国四国地区の音楽教育研究大会において，徳島県の代表として実践研究発表をすることが決定されていた。さらに，その翌年に徳島県で開催される同研究大会において，研究授業を公開することも決定されていた。これらの研究活動は，いずれも鑑賞指導場面に限定して追求していくように計画されていた。したがって，森本教諭にとって，10年経験者研修は，これらの一連の研究活動を開始する大切な準備期となった。もう一つは，10年経験者研修の成果を学校現場に還元させることを目的とした学校活性化プランの構想をめざして，「合唱活動を通じての仲間作り」という課題が設定されていた。この課題は，音楽の授業の成果を生徒指導場面にまで拡大させていこうとする内容になっていた。

具体的なサポートは，秋に学校内で実施された研究授業の準備の段階から始まった。オペラの教材化を試みた授業の構想であったが，事前のメールを通して，学習指導過程の展開やワークシートの開発等に関して助言を行い，研究授業の当日は実際に附属中学校に行って，授業を参観し，その後の研究協議会では助言を行った。森本教諭の場合，10年経験者に期待される自律的な授業構想力や授業展開力，授業評価力に関しては，評価スタンダードの内容を十分に満たしているので，この研究授業では，森本教諭の研究課題である鑑賞の学習の活性化を促す言語活動のあり方を本格的に検討していくことができた。

次に，次年度に予定されている研究発表の準備に向けて，研究協力員としてサポートする徳島市内の公立中学校の音楽教諭との研究会が開催された。この研究会にも，森本教諭からの依頼で助言者として参加し，森本教諭の研究構想が共有されるように努めた。特に，附属中学校が今年度までの研究で扱ってきた「パフォーマンス課題」と「ルーブリック」という概念は，まだ，一般には十分に周知されていないので，アメリカで開発されたこれらの概念の意味と音楽授業場面での可能性について，情報を提供した。

森本教諭に対しては，新しい学習指導要領で主張されるようになった言語活動の意味を理解していただくために助言を継続している。特に，森本教諭の要請に応えながら，音楽の知覚と感受の特性，音楽によるコミュニケーションの特性，音楽の学習における言語活動の役割，音楽評論活動の質的な深まり等に関する情報を提供してきた。また，学校活性化プランの方で検討されている合唱活動による仲間作りの活動に関しては，思春期の子どもたちの心理にあった合唱曲の特性に関する研究情報を紹介した。

以上のように，森本教諭の課業期間中研修の中で，特に，音楽に関わるサポートは，研究授業の構想の段階から関わり，研究授業に参加し，研究協議を通して，情報の提供を続けてきた。森本教諭のように，10年経験者研修から派生して，音楽科の研究行事で研究発表や研究授業等の活動が予定されている場合は，多様な支援を本人が必要としていたので，サポートは円滑に展開できた。

（長島　真人）

3　生徒指導の研修サポートの構想と展開

生徒指導では，鳴門市撫養小学校の松浦理恵教諭が10年経験者として意欲的に課業期間中研修に参加していた。松浦教諭が勤務している鳴門市撫養小学校長に承諾を得た後に，サポートを開始した。

松浦教諭は，特別支援学級の担任である。６年生男子１名，4年生男子２名，3年生男子２名の計５名の学級である。松浦教諭は「子どもたち一人ひとりの自主性，社会性を育てる支援のあり方」を課業期間中研修テーマとしていた。当初は，メールでのサポートを考えていたが，情報を共有し，支援していくためには，やはり実際に教室まで足を運び，子どもたちとふれ合うことが最も望ましいと考えた。そこで，生活単元学習の時間割が組まれている火曜日に終日，訪問することにした。朝の会，授業，休み時間，給食，清掃，帰りの会等，一日の流れを把握することが，松浦教諭の研修テーマの最も効果的な解決につながると考えたからである。

訪問する前に，学級経営案を事前資料としていただいた。そこには，児童の実態として，次のような内容が書かれていた。

・明るく素直であるが，自己中心的な言動をとることがある。
・基本的生活習慣が身についていない児童も見られる。
・人とのコミュニケーションをとることを苦手としている。
・自主的に考えて行動することができにくい。

これらの児童の実態をふまえ，経営の具体策として，次のようなことが記述されていた。

・あいさつ，整理整頓，言葉遣いなどの基本的生活習慣を身につけさせるとともに，一人ひとりをしっかりと見つめ，心のふれあいを大切にする。
・交流学級と連携をとり，同じ学年の友だちとうまくつきあうことができるようにする。
・学級の中では，異学年の友だちと仲良く活動ができるように工夫する。
・係活動・当番活動を責任をもって進んでできるようにする。
・きまりを守り，物事の善悪を自分で判断し，進んで正しい行動がとれるようにする。
・学校行事や集会活動に進んで参加し，楽しく活動できるようにする。

これらの児童の実態，学級担任の経営具体策をふまえ，サポートに入った。具体的な方法として，まず，子どもたちとともに行動をすることから始めた。

生活単元学習「ハンカチを染めよう」では，「どうしたらきれいな模様になるかな？」，「まずこの部分を輪ゴムでとめたらどうなるかな？」等，教師や友だちに頼らず，自ら工夫しようとするように言葉がけをした。その結果，子どもたちは，自分なりのやり方を発見し，ハンカチ染めにチャレンジしていった。休み時間には，魚図鑑をいっしょに見たり，キャッチボールをしたりして遊ぶことによって，児童が本音で話をしてくるようになり，信頼関係ができていった。音楽の好きな児童は，「先生，この曲，吹いて。」と教科書を持ってきて，メロディーを口ずさんで楽しんでいた。その様子を見ていた松浦教諭は，「教師も子どもといっしょに活動することが大切なんですね。」と改めて実感していた。その他にも，交流学級の担任と絶えず情報交換を行い，連携を密にすることの大切さも再確認することができた。そして，何よりも効果的なサポートとなったのは，実際の子どもたちの活動中に，情報を共有することができたことである。

以上のように，課業期間中研修の中で，実際に学校訪問をし，情報を共有して支援していくというサポートの方法は，松浦教諭にとって実践的な課題解決となり，たいへん有意義なものとなった。サポートをする側にとっても，今後の支援の在り方に大きな示唆をいただくことができた。

（豊成　　哲）

4　インターネットを利用した研修サポート・情報共有の試行と課題

◆インターネットを利用した研修サポートの実際

課業期間中研修のサポートにおいて，受講者と大学の教員が直接会うだけでなく，電話やメールといったメディアを利用する場合が増えてきている。メディアを利用した研修サポートが効果的なものであれば，積極的に導入するのがよい。しかし，一般にシステムが“高度”になればなるほど，その使い方を習得するために多くの労力と時間が必要となる。受講者は，研修を受けるだけでなく教員として実に様々な教育活動を展開しており，非常に多忙な毎日を過ごしている。システムの使い方の習得やシステムを利用するのにかかるコストは可能な限り軽減すべきである。

電子メールは，特に携帯電話の普及によって，今やたいていの教員にとってもなじみ深いものになった。使い方の習得にコストをかける必要はなく，その利用には心理的な抵抗も少ない。実際，今回の課業期間中研修サポートにおいても，大学教員がメールを利用して受講生とやり取りを行ったり文書を交換したりなどの活動が見られた。

◆メーリングリストを利用した研修サポート

研修の「成果」は，レポートとしてformalな形式でまとめられる。しかし，その「成果」に至るまでのプロセスには，受講者とサポートする大学教員が何に注目しどのように考えたかという知がinformalな形式で“埋め込まれて”いる。その知はある種の実践知であり，その明示化と共有は研修全体の質を高めると期待される。プロセスに埋め込まれた知を明示化し共有する手段としては，メーリングリスト（ML）を使った非対面のサポートが考えられる。そこで，MLを利用した研修サポートの可能性について検討した。

MLとは，特定のメールアドレスにメールを送信すれば，そのMLに登録されているメンバー全員に同じ内容が届くという仕組みである。MLシステムとしてはGoogleグループやfreemlなどフリーのサービスも存在するが，今回は，鳴門教育大学高度情報研究教育センターが学内向けに提供しているサービスを利用した。当センターでは，Mailmanというシステムを導入している。Mailmanには，ML上のやり取りを自動的にWeb上に蓄積する「保存書庫（アーカイブ）」という機能と，保存書庫を誰でも見られるようにするかML参加者に閲覧を限定するかを設定する機能が基本機能として備わっている。実際に動作を確認したところ，保存書庫に蓄積されたメールを閲覧する際の手順が少々煩雑であるものの，添付ファイルを含めてMLでやり取りした内容を共有できるという点で有効性が高いと感じられた。

◆今後の課題

他の受講者や他の大学教員や指導主事が，MLを利用して特定の受講者と大学教員が行ったやり取りを共有したり，その議論に加わったりすることで，研修全体にどのような効果を及ぼすのかについては，今後ぜひ検討すべき課題である。

ML以外のインターネットを介したシステムのうち，mixiに代表されるSNSやskypeのようなビデオ会議システムは普及しつつあり，メールと同様に比較的“コストの低い”ツールである。特に徳島県総合教育センターでは，多地点をつないだテレビ会議を実現するシステムを導入しており，（研修サポートではないが）活用事例が蓄積されている。今後の課題として，それらを活用したサポートについて検討することには大いに意味があるだろう。

（藤原　伸彦）